

## 「前世療法」の臨床心理学的検証——その問題点と可能性

A Critical Evaluation on Past-Life Therapy from the perspective of Clinical Psychology :  
its problems and possibility

石川 勇一

## 研究論文 「前世療法」の臨床心理学的検証

—その問題点と可能性

A Critical Evaluation on Past-Life Therapy from the perspective of Clinical Psychology : its problems and possibility

石川 勇一 (相模女子大学) \*

Yuichi Ishikawa/ Sagami Woman's University

### I はじめに：なにを検証するのか

前世療法ほど、その名をきいたものにさまざまな空想や疑念をかき立てるユニークな心理療法はないだろう。心理療法を謳っているにもかかわらず、通常では宗教的または形而上学的な観念である「前世」を前面に打ち出しているからである。

そもそも、「前世」とは、人間の死後への根本的な問いへのひとつの回答として、世界各地で信じられてきた輪廻転生観の中で生きてきた考え方である。体系的な思想としては、前8～7世紀頃にインドのウパニシャッド哲学において業(カルマン)の概念とともに種々の輪廻説が説かれ、ヒンドゥー的な世界観に浸透した。その後、仏教にも六道輪廻として受け継がれ、唯識では精密な理論化が試みられている。そのほか道教や、古代ギリシアにおいても、前6～5世紀頃にオルフェウス教、ピタゴラス、プラトンなどが靈魂不滅を唱えている。一神教においてさえ、中性キリスト教の異端であるカタリ派(絶対派)や、ユダヤ教神秘主義のカバラ思想などにも輪廻転生観を見いだすことができる。もちろん、これらの輪廻観は決して一枚岩ではなく、多種多様なバリエーションがある。

このような宗教的、思想的輪廻観が脈々と各地で展開される一方で、19世紀後半に科学的方法論がその勢いを増してくると、死後の謎についても経験科学的なアプローチがなされるようになった。特に1960年代以降、臨死体験やサイケデリクス、退行催眠などによる研究が進められてきた。なかでもスティーブソン<sup>8)</sup>の、偶発的に前世の記憶を想起した子どもの2300以上の事例による詳細な調査はその代表格であり、検討するに値する問題提起となっている。

前世療法(Past Life Therapy; 過去生療法と呼ばれることもある)が広く知られるようになったのは、ベストセラーとなったワイスの『前世療法』<sup>9)</sup>(1988年)を契機としているが、それ以前から各地で前世退行は実施されている。実際、1985年に国際退行療法協会<sup>3)</sup>(International Association for Regression Research and Therapies ;

I.A.R.R.T.)が設立され、「退行療法研究」(Journal of Regression Therapy)という雑誌を1986年から現在まで毎年刊行している。ここでは、臨床的な視点から、医師や博士号を取得した心理療法家などが多数参加して、前世療法を含めた退行療法に関して、事例研究や理論的研究を積み重ねている。

後にⅢで検討するが、前世療法による前世の記憶が、客観的な記憶であるという証拠はまだ不十分であり、輪廻問題を検証する経験科学としては、その基盤は脆弱である。しかし、臨床的視点から眺めるならば、前世記憶の真偽はさておき、数多くの改善または治癒例が報告されているのは注目に値する。筆者の数少ない前世退行の臨床事例においても、前世体験を通じたセッションによって貴重な洞察を得たり、顕著に改善したものが数例見られた。そこで本論では、輪廻の真偽問題ではなく、心理療法としての前世療法に焦点を当て、臨床心理学的に検証することを目的とする。わが国においては、これまで前世療法については、いくつかの一般向けの書籍は見られるものの、学術的・臨床心理学的な視点ではほとんど論じられていない。そこで、本論では前世療法を全般的に概観し、議論の焦点となる問題について整理したい。より詳細な各論や、事例研究などは、今後の研究で検討されることを期待する。

### II 前世療法の実際

#### (1) 前世療法とは

はじめに、前世療法の基本的な手続きについて紹介する。前世療法は、誘導法やセッションの展開によって種々のバリエーションがあるものの、基本はきわめて単純な退行催眠である。前世退行に合意したクライアントに対し、まずは催眠誘導によってトランス状態に導く。そこで扉やトンネル等のイメージを描いてもらい、そこをくぐって前世にまで退行させる。もし前世の場面に到達したら、その人生での重要な出来事を十分に再体験し、記憶が詳細に蘇るよう導いていく。そこでトラウマになるような出来事を体験すれば、感情的なカタルシスや、現在の問題に変化が起きる。さらに可能であれば、前世の人生を高次の視点から内省したり、前世と今生との関連性について洞察する。そうすると、さまざまな心身の問題が改善あるいは解決し

\* 〒228-8533 神奈川県相模原市文京2-1-1  
2-1-1 Bunkyo, Sagami-hara-shi, Kanagawa 228-8533

たり、新たな視点での気づきが訪れたり、人生のより深い意味を発見するというものである。

次に、前世療法の効果についてである。ウィリントンとジョンストン<sup>13)</sup>は多くの前世療法の事例を紹介しながら、その効果について次のような12項目に集約している。①ストレス軽減、②苦痛、罪悪感、不安、恐怖の統制や消滅、③集中力の増進、④潜在的な才能の開花、⑤使命感の喚起、⑥両親や親友への理解の深化、⑦抑圧された感情の解放と心的外傷の治癒、⑧活力、統制力、決断力、自信の獲得、⑨疾病の予防、⑩心の目の鍛錬、⑪人生の意味と目的を知る、⑫能動的な行動。

ワイス<sup>10)</sup>は、前世療法の効果について、感情のカタルシスなどの心理的効果、リラクゼーションなどの身体的効果、そして不死を確信するなどの霊的効果があるとしている。

前世療法の適応症については、「様々な恐怖症、パニック、悪夢、理由のわからない恐れ、肥満、対人関係不適症、肉体的な苦痛や病気等から解放され」たほか、「筋肉や骨の痛み、薬では治らない頭痛、アレルギー、喘息、ストレスや免疫不全による潰瘍や関節炎等に、特に効果」があるとし、「ガンの症状を改善することもある」<sup>10)</sup>としている。さらにワイスは、霊的側面における治療効果を強調する。「自分の肉体は死んでも、自分自身は死なないということを経験する」ことによって、「人間は誕生や死を超越した神の資質をもっていること」や、「誰もが自分の中に崇高な力を宿しており、私たちが自らの神聖な能力に気づき到達するために、その力が私たちの人生を導いてくれていること」を学ぶのだという。その結果、「彼らのエネルギーが恐れや苦しみから、癒しのプロセスへと向けられる」ようになり、最後には「みな死を恐れなくなり、人生でもっとも大切なものは愛であることを悟るのです。」<sup>10)</sup>と繰り返し主張する。

ワイス<sup>10)</sup>によれば、彼の経験上、患者の40%は、現在の問題を解決するために前世にまでさかのぼるの必要があり、他の大部分の人々にとっては、今生の過去に戻るだけで、十分に効果があるとしている。

以上のように、前世療法はきわめて適応範囲が広く、心理的・身体的・霊的に癒されるとされている。そして、ウィリントンもワイスも、いずれも前世の記憶が客観的なものであるという確信に満ちており、従来のどの心理療法に比べても、死生観や世界観、価値観の領域に躊躇なく踏み込んでいるのが特徴である。

## (2) わが国における実施状況

次に、わが国における前世療法の実施状況を概観する。わが国においては、精神世界系の雑誌や女性誌、テレビ番組などによって前世療法が紹介され、一部の層で流行し

ているかに見える。精神世界系の雑誌（「Fili」, 「therapy」）およびWeb上で前世療法を実施している施設を検索したところ、2004年1月現在、日本全国に93施設、前世療法を実施するセラピスト121名の存在が確認された（表1参照）。各施設へのクライアントの来訪者数は不明であるが、都市部を中心にすでに広域で実施されていることがうかがえる。

調査機関数	93施設
都道府県別施設数	①東京 43 ②神奈川 10 ③大阪 7 ④愛知、兵庫、千葉 各3 ⑤岡山、京都、長野、山梨 各2
セラピスト数(総数)	121名
1セッションの時間	20分～4時間 ①2時間：28 ②1時間30分：16 ③1時間：14
1時間当たりの料金	2000円～25000円（平均7998円）
セラピストの有する資格	①全米催眠療法協会認定催眠療法士 33名 ②全米クリアサイト認定ヒーラー 20名 催眠技能士（日本催眠医学心理学会）0名 臨床催眠資格（日本臨床催眠学会）0名 臨床心理士（臨床心理士資格認定協会）2名
セラピスト養成講座の実施	14施設

表1 雑誌およびWebによる前世療法実施機関の実態調査

前世療法を行っているセラピストとは、どのような考えや技能をもっている人たちであろうか。正確な実態把握は困難であるが、ひとつの目安として、取得資格の状況を調査してみた。もっとも多かったのは、全米催眠療法協会認定催眠療法士（33名）である。この資格は、かつてわが国で実施されていた2日間の講座で取得可能であったため、多数の取得者がいるものと思われる。この資格は、日数からもわかるように、ごく初歩的な内容であり、専門的スキルを証明するものではない。次に多かったのは、全米クリアサイト認定ヒーラー（20名）というものだが、これもわが国の講座で取得できるもので、透視等の内容を含むもので、心理療法とは基本的に異質のものである。前世療法のセラピストは、レイキなどのよく知られた資格から確認不能のものまで、いわゆる精神世界系のヒーリングとかボディワークと呼ぶことのできるような代替療法の資格を取得していることが多い。

一方で、わが国において催眠関係の重要な資格である、催眠技能士（日本催眠医学心理学会認定）や臨床催眠資格（日本臨床催眠学会認定）を取得したものは0名であった。心理療法関係で基礎知識や技能を証明するとされる資格で

ある、臨床心理士（臨床心理士資格認定協会認定）は2名（そのうち1名は筆者）、その他の認定カウンセラー（日本カウンセリング学会認定）等の資格保持者も0名であった。

いうまでもなく、取得資格とセラピストの力量とは別物であるが、最低限の研修歴の目安にはなる。本調査でのデータによれば、個別の例外は別として、全般的な傾向として、わが国の前世療法セラピストの多くは、催眠療法や心理療法に関する専門的な知識や技能を身につけていない、いわゆるレイピプノティスト（民間催眠療法家）あるいはレイセラピスト（民間心理療法家）といっても間違いではないと思われる。

### （3）臨床心理学との隔絶という問題

レイセラピストはつねに力が劣っているわけではない。むしろ、独特の能力や経験、感受性を備えた個性的な人物であることも多い。しかし、レイセラピストはしばしば共通した弱点をもつ。彼らはしばしば、たとえ臨床経験が多くとも、知識が絶対的に不足していたり、偏った知識であったり、ひとりよがりな考えをもっていたりする可能性が高い。霜山<sup>7)</sup>がいうように「心理療法は最終的には独覚するものである」から、大学院等で教育を受けたり、学会その他の場でスーパービジョンを受けたりしたからといって正当で偏りが無いなどは決していえない。しかし、心理療法を行うものは、複数の場で研鑽を積み、相互批判的な研修の場で自らの臨床行為を白日の下にさらしながら、検証し続けていかなければ、ひとりよがりな脱線や暴走を起こしやすいのである。特に催眠や精神世界系の内容に関わるものは、この傾向はより顕著である。したがって、セラピストが専門家集団という共同体の一員として、技能の質的向上を図る機能的なシステムが必須なのである。

一般に、確立された心理療法は、独自の治療目標、適応症、治療理論、治療過程の定式等が整備され、開かれた教育システムや研究システムを保有するのが普通である。そして、それぞれの学派・技法の下部には、通底する基礎としての臨床心理学的知識が横たわっている。このような共有された基盤の上に諸流派や技法がのっているという構造のために、立場が異なる心理療法家が集まっても、臨床心理系の学・協会では事例検討会などの研究会を行うことが可能なのである（図1参照）。つまり、諸技法・諸学派も臨床心理学内にある多様なものである。

しかし、わが国の前世療法は、このような開かれたシステムや学問とは現状では隔絶している。一部の代替療法に見られるように、独自に優れた教育・研究システムが機能していれば話は別であるが、前世療法にはそれも見られず、ほとんど無秩序状態にある。前世療法セラピストは、一般の心理療法家が学会等の開かれた場で相互研鑽しているという事実を知らないことも多い。共同体による研修の場がないと、知識や交流が限定されるので、セラピストとして不足している能力の自覚が生まれにくいし、技能向上もより困難になる。そもそも、研修以前に、基礎知識も不足している場合が多い。中には十日間にも満たない研修だけでセラピストとして活動している人も稀ではないし、教養レベルの臨床心理学的知識もたない自称セラピストはわが国では非常に多く、危険な業界といえるだろう。精神世界系に多いレイセラピストは、他に研鑽を積む場合にも、しばしば図1の左側には目を向けず、右側の領域で資格のカードをコレクションする傾向がある。

同様に、左側の確立された心理療法を身につけたものは、右の領域を頭から否定したり拒絶することが多く、まったく情報を知らないのに見下していることもしばしばである。したがって、彼らが自ら右の領域に踏み込むことは稀なのである。実際には、右の領域の中には左には見られない優れた技術や知恵が埋もれていることもあるにもかかわらずである。右と左は、どちらでも「療法」「セラピー」「癒し」などの共通する言葉が踊っているが、見えない厚い壁があるのである。

このように、わが国の前世療法の実施状況を概観すると、残念ながら全般的には専門性からは隔絶し、素人療法的に広がっている。そのような状況のなかで、セラピスト養成のコースを設けているのは14施設にのぼり、今後もレイセラピスト増加の傾向は続くと思われる。いうまでもなく、催眠の技法はクライアントにとってインパクトが強く、侵襲性が高いため、十分な心理療法家としての知識・技能・自覚がなければ、クライアントにとって危険である。

ワイス<sup>10)</sup>は、前世療法では事前に十分な病歴調査等のインタビューが重要であること、催眠中に患者にあったペースで記憶を思い出させること、そして「催眠中に導き出さ

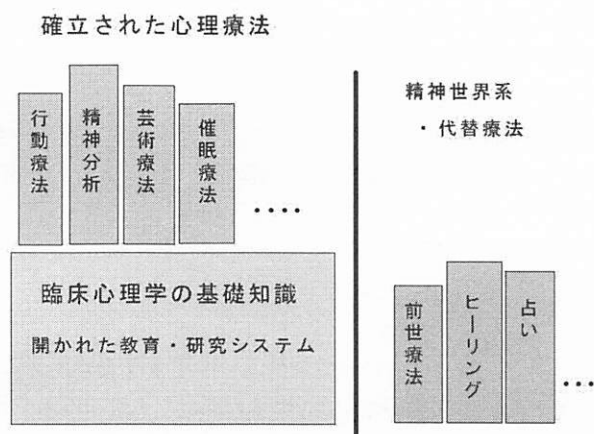


図1 確立された心理療法（左側）と精神世界系・代替療法（右側）の比較

れた感情や気づき、情報等を現在の状況と統合させること」が不可欠であるとしている。そして、これらの実施には「かなり高度な専門的知識と経験が必要」であると述べているのだ。つまり、前世療法の実施には、催眠はもちろん、催眠以外の心理療法の全般的な素養は不可欠なのである。前世への退行催眠そのもののスキルは、実際それほど難しいものではない。センスのいい人なら一日のワークショップでもある程度は身につけられる。しかし、その技術を柔軟に使いこなし、多様なクライアントに責任をもって戦略的に対処していくなどという心理療法の総合力は、一朝一夕に体得するのは不可能である。

#### (4) 心的および霊的経験科学への条件

スピリチュアルなセラピーは学会等ではまだ理解されていないとあって、むしろアカデミズムや共同体に対して優越感を覚えているレイセラピストもいるが、これは大変な考え違いである。周知のようにウィルバーは、知識を獲得する様式として、「肉の眼」「理知の眼」「黙想の眼」の三つの眼があるとした<sup>11)</sup>。対象とする世界によって適切な知のモードが必要であり、なおかつどのモードにおいても仮説と実験、そして共同体による検証が可能であり、不可欠であるとしている。すなわち、ウィルバーが「有効な知全体の三つの要素」と呼んでいる、介助的指示、直接的感受、共同体的確認の三段階によって、「単なるドグマや信仰や検証不能な憶測に頼らない」正当な証拠を提示でき、経験科学として確立できるのである<sup>12)</sup>。いうまでもなく、心理療法は正当な経験科学に立脚しなければならない。そのためには、ウィルバーが強調するように、特定の教育と訓練を受けることが大前提であり、なおかつ検証作業を行える共同体（専門家集団）とつながっていないとてはならない。前世療法がたとえスピリチュアルな事象を扱っていたとしても、それならば黙想の眼による経験科学的な検証が必要なものであり、個人の勝手な思いつきや直観が早急に絶対化されてはならないのである。

もう一つ重要なことは、トランスパーソナルな領域は、合理性を「含んで越えている」のであって、合理性以前なものではない。合理的な知的訓練と臨床の基礎教育を受けていないセラピストが、相互研鑽の場ももたずに前世療法を行ったり報告を行ったとしても、それはしばしば個人のもつドグマ、信仰、思いこみ、憶測が峻別されずに混合し、合理的視点が欠落しているので、信頼できる報告やセラピーにならないのである。そればかりか、前合理的な自己愛的万能感や魔術的思考をクライアントにも伝播させ、自我肥大を誘発しやすいなど、むしろ有害なセラピーになってしまう危険もある。

#### (5) 前世療法の課題：専門家集団とのつながり

前世療法を実施するセラピストは、必要な教育と訓練

を受け、臨床心理学の土俵にのることが必要である。つまり、霊性との垂直的関わりも重要であるが、それを健全に生かすためには、専門家集団との水平的なつながりも欠かせない。そこで、合理性、共同性、客観性、社会性、実証性を十分に尊重した上で、セラピストがプロフェッショナルな総合力を身につけることがまず必要なのである。このステップを無視して直観と称する思いつきを安易に語ったりするのは、しばしば前合理的で、人を惑わせることになり、援助とは逆のベクトルをもつことになる。そして、開かれた場で前世療法を相互に検討していかねばならないだろう。

図1の左右の領域の分断によって、もっとも不利益を被るのはクライアントである。クライアントから見れば、右側と左側のどちらの領域も、同じセラピストとして認識するという足を踏まれば、レイセラピストの失敗は、専門的な訓練と経験を積んだ多くの心理療法家および専門家集団全体に対しても迷惑なのである。さらに、前世療法が心理療法として有効であるならば、一般向けの商業的活動に奔走する前に、専門家集団の中で質の高い検討がなされなければ、かえってその信頼を失うことになるだろう。そして、このような状況は前世療法だけではなく、右側の精神世界系のセラピーやヒーリング、未確立な代替療法の多くに通底した問題であると思われる。

一方、逆の視点に立てば、右側の領域の中にも非常に優れた視点や技法があることを、左側の領域の心理療法家が知って交流が起これば、しだいに真にトランスパーソナルなものが理解されるようになり、左右の心理療法はより一層豊穡さを増すにちがいない。

### III 催眠における偽記憶問題

#### (1) 前世記憶の客観性

前世への退行催眠を施すと、多くの人々は、自分が違う時代に違う土地で違う人物になって生きているイメージを体験する。これを「前世体験」と呼ぶことにすれば、数多くの報告からしても、筆者の経験からしても、前世体験がしばしば生じること自体は疑う余地のない事実である。しかしこのような「前世体験」が、はたして客観的な出来事の記憶の想起かどうかとなると、ずっと問題は複雑になってくる。

もちろん、前世への退行を誘導しても、到達できないことも頻繁にある。筆者の体験では、なにも見えない人、子ども時代の体験が蘇ってくる人（一般的な年齢退行）、アニメ映像やパステル調のイラストで見えてしまう人、テレビで見た芸人が出てくる人、風景ばかりで他者が決して現れない人、暗闇に入りこんでいる人、身体が引っぱられるなど身体感覚のみが現れる人、怒りや悲しみなどの強い感情だけが湧き上がる人、死んだ親類が現れて感激する人、

神秘的な雲や寺院・神殿等になってしまう人、宇宙空間に飛び出してしまう人など、非常に多様で予測不能な展開が見られた。そのなかには、明らかに記憶の混線や日常の残滓、フロイトが悟ったような心的現実を反映したシンボルや物語、さらには神秘的な場面などが含まれるが、それぞれの真の意味を特定するのはしばしば困難である。

前世体験をしたクライアント自身も、その客観性に対して疑問を抱くことは多い。前世体験が客観的な前世の記憶であると確信しているクライアントにその理由を尋ねると、たいていは次のような回答が帰ってくる。「体験がとても強烈だったから」「映像が鮮明だったから」「勝手に見えてきて、自分ではコントロールできなかったから」など。一方で、前世かどうかはわからないが、それはたいした問題ではなく、こういう体験ができて、学べただけで十分だ、と受けとめる人もいる。

ウィリソンは、記憶の客観性を示唆する興味深い事例を多数報告している<sup>15)</sup>。ダム建設によって沈んでしまった現存しない町の名称を語ったり（古地図によって後に確認）、夫婦で別個に催眠セッションをしたら両者ともアトランティス時代に出会っていた共通の場面が出てきたり、一般には知られていない底だけが木でできた靴を描写したり（後に木靴の存在を確認）、百年前に卒業した医学校の氏名と年代を語り実際に確認できた事例などである。ウィリソンとジョンソンは、「過去生への対応が本当であることを証明するもっとも説得力のある証拠は、これらのように、ごく普通の人々の日常生活の描写である」と述べ、「退行で思い出すのは、正真正銘の過去生の記憶である」と考えることよりも、「あのように生々しくその場面を演じきる並はずれた才能を、誰もがもっている」と考えることの方が、私にとっては、はるかに信じ難い。」<sup>15)</sup>と結論している。

ワイスは、退行催眠による前世の記憶は、80%は実際の記憶、10%がシンボルや比喩、10%がゆがんだものであると述べている。前世の記憶は心理的幻想や投影、作り話ではなく、「まず過去生があり、その記憶や衝撃やエネルギーが、今の人生の子ども時代を形成してゆく」と述べ、通常とは逆転した視点を提示している<sup>16)</sup>。

しかし、経験科学的な視点からいえば、ウィリソンとジョンソンやワイスの考えは、生まれ変わりの事実性を裏づけるだけの十分な根拠を示しているとはいえない。ステーブソンが生まれ変わりの実証のために必要と考える以下の8条件（要約）を見れば、それが明白になる（アルメダーによる集約を要約）<sup>17)</sup>。

①透視、テレパシー、潜在記憶では説明できないものが豊富にあること、②現世では学習されていない複雑な技能が存在すること（異言など）、③前世での負傷の事実の確認やそれに対応する母斑があること、④催眠のトランス状態を必要としないこと、⑤過去の人格と現在の人格が連続

していること、⑥それが両親等の影響では説明できないこと、⑦前世時代の特定の出来事や人物への感情的反応が予測できること、⑧過去の人格の遺族や友人に本人の生まれ変わりと認められること。

④は後に述べるように、そもそもステーブソン<sup>18)</sup>は催眠誘導による記憶をほとんど信頼していない。しかし、④を除いたとしても、他の条件のいくつかを適用するだけでも、前世療法の事例報告では、生まれ変わりを断定する根拠としては不十分と思えるものがほとんどなのである。少し考えただけでも、過去に学んだ断片的知識を素材として構成した物語である可能性や、現在あるいは過去の「他者」の記憶の場にアクセスしている可能性などを完全に否定するのは困難なのである。実は、このような議論は枚挙にいとまがない。このようなクリティカルな議論は、エドワーズ<sup>21)</sup>がもっとも詳細を究めているが、本論ではそれを検証する余裕はない。ただし、前世療法の記憶に関しては、客観性が十分ではなく、議論の余地が存分に残されていることだけはここで確認しておきたい。

## (2) 偽記憶の危険性

今日の認知心理学では、記憶の想起とは一般に、つねに記憶の再構成のプロセスが介在しているとされる。記憶とは、つねに時間的・論理的なつじつまがあうようなストーリーをその都度構成されているということである。

前世記憶の事実性を考える上で決定的に重要なのは、ロフタスとピックレルの「記憶の植え込み実験」<sup>5)</sup>だろう。この実験の概要は次の通りである。あらかじめ被験者の身内などから、その人の子ども時代のエピソードを入手しておき、被験者にそこから実際の出来事3つと、架空の出来事1つを、それぞれ物語形式にして提示する。架空の出来事とは、「5歳の頃、ショッピングモールで迷子になり、泣いているところを老人に保護されて、なんとか家族に再会できた」という内容である。被験者はその4つの出来事について覚えていることより詳しく想起するよう求められる。数日間に渡って数回の面接を行い、その後それぞれの記憶がどの程度はっきりしているかを点数で自己評定してもらう。結果は、18歳から54歳の24人の被験者のうち、6名（25%）が二回目の面接でも「偽りの記憶」を事実として想起したのである。そして驚くことに、記憶の明白さの評定では、「偽りの記憶」の方が客観的な記憶よりも高い得点がついたのであった。以上から、現実にはなかった出来事の記憶（偽記憶：false memory）を丸ごと植え付けることが可能であることが実験的に実証されたのである。

この実験は日常的な意識状態において行われたものであるから、もし催眠などによって非暗示性を高進させた状況で、誘導暗示が含まれているならば、これよりもずっと偽記憶の創造は容易なものとなることは想像に難くない。つまり、催眠下で蘇った記憶はたとえどんなに鮮明であった

としても、そのみで客観的な記憶と判断を下すことはあまりに早急すぎることを示唆している。

90年代に米国で大流行した「記憶回復療法」は、この点を誤って大騒動を引き起こしている。八幡<sup>16)</sup>の詳細な報告によれば、ハーマンらを中心とした記憶回復療法によって、米国の多くの女性が幼児期に受けたさまざまな暴行や性的虐待の記憶を蘇らせ、両親を訴える裁判を起こし、社会問題にまで発展した。しかし、調査をしても訴えを支持する虐待の客観的証拠はほとんど発見されることがなかった。記憶回復療法は、ロスタフらの実験によって理論的根拠が大きく揺らぎ、多くのセラピストが断罪され、この療法は一気に衰退の道を辿っていった。後の検証によれば、記憶回復療法によって蘇った記憶の多くは客観的事実とはかけはなれており、治療効果もむしろ悪化したものが多いという惨憺たる実情が暴露されるに至ったのである。

前世療法と記憶回復療法には次のような共通点がある。第一は、催眠を用いること。第二は、過去のトラウマが原因であるという前提があること。第三は、著名なセラピストが啓蒙的に一般に働きかけて一部の人々に強い影響力をもつことである。したがって、記憶回復療法の大きな代償を払って得た教訓は、前世療法と無関係ではない。幼児期の記憶でさえ、偽記憶が多いことが明らかになったのであるから、ましてや肉体の連続性のない前世の記憶といえ、その客観性は一層怪しいと推論するのが妥当な思考回路であろう。

特に、共通する催眠の技法のなかで、ワイスが多用している詳細化の技法には注意が必要である。たとえばボヤツとしたイメージが浮かんでいるときに、セラピストが「今まわりは明るいですか」「足には何かはいていますか」「どんな気持ちでしょうか」「あなたは今何歳くらいですか」などと質問をすることによって、状況を明確化していくことである。これによって、イメージが誘導され、その場で創造される危険性がある。

一方、前世療法は、次のような点で記憶回復療法と異なっている。第一に、記憶回復療法では、「私は(性的)虐待の被害者だった」というかなり限定的ストーリーの記憶を求められるのに対して、前世療法においては、期待されるのは「前世」のみで、そのなかでのどのようなストーリーを構成するかということに関しては完全にクライアントに任されていて、自由度がかなり高い。第二は、記憶回復療法は、現在も加害者が現存していることが多いため、加害者との関係が現実場面においてもつれる場合が多い。それに対して前世療法では、今生の出来事ではないので、たとえ殺人があっても訴訟にはならない。現実との間に多少の遊びがあり、ゆとりがあるのである。

このように、前世療法の方が、自由度が高く、ある意味で現実離れしているという特徴があるが、記憶の客観性という点では、記憶回復療法と同様に不確かであるというこ

とができる。

### (3) 前世体験の客観性を確信させる要因

多くの人が前世体験を事実と考えるのは、イメージがとても鮮明で、強烈な印象を与え、イメージが自律的に展開することがその理由である。

イメージの鮮明さについては、ロフトスの実験<sup>5)</sup>で実証されたように、客観的記憶よりも偽記憶の方がむしろ鮮明になるのだから、当然客観性の根拠にはならない。催眠療法やイメージ療法を実施すればわかることであるが、深いリラクゼーション状態に入れば、客観記憶であろうと想像であろうと、非常に鮮明で明瞭なイメージを見ることができるのである。そしてそのような体験は、極度に集中かつ弛緩した状態であるために、現実場面以上にリアリティがあり、強烈な体験になる。しばしば催眠からさめた後に、クライアントは目を輝かせて前世体験を語ってくれる。イメージの鮮明さや体験の強烈さは、臨床的效果にはつながる場合があるが、客観性の根拠ではない。大きな夢を見たときに、それが強烈な印象と情動的体験をともなったからといって、その夢が客観的な出来事だと考える人はいないのと同様である。

自分が意図しないにもかかわらず、思わぬイメージが登場し、勝手に展開していくために、それに神秘的な印象を受け、客観的な前世であると考え人も多い。中には、自分でイメージを操作しようと試みたが、うまくいかなかったと催眠中に実験するクライアントもいる。しかし、イメージの世界は、無意識が主人公の世界なので、意識がすべてを操作できないのはむしろ当然なのである。それらは、個人的または集合的無意識の世界の顕在化として意味深い、これも夢と同様で客観性の根拠にはまったくならないのである。

これまで見てきたように、ワイスやウィリスの主張とは裏腹に、現時点では前世体験の客観性を支持する根拠は十分ではない。しかし一方で、蘇った記憶がつねにすべて主観的なつくり話であると決めつける根拠もまた同様がないのである。ただし、もし記憶の客観性を確認する必要があるならば、スティーブソンのように、幾重にも慎重な方法で検証していかなければならないだろう。

しかし、前世の経験科学的研究の第一人者であるスティーブソン<sup>8)</sup>は、次のように述べている。「心得違いの催眠ブームを、あるいは、それに乗じて不届きにも金儲けの対象にしているものがあるという現状を、特に前世の記憶を探り出す確実な方法だとして催眠が用いられている状況を、なんとか終息させたいと考えている。」つまり私たちは、「前世療法」がしばしば安易な商業主義や精神世界的感傷主義、あるいは宗教的な自己誇大感を支持するために利用され祭りあげられているという状況、特にわが国の状況をまず見通す必要があるのだ。

#### (4) 前世療法の課題：前世イメージ療法へ

前世療法によって、客観的な前世の記憶を蘇るということを支える根拠は、現時点では不十分である。前世療法によって、臨床的効果があがったということと、前世体験の客観性とは別のことなのである。今後、経験科学的な眼で前世療法の記憶の客観性を検証していくというのは重要なテーマである。

とはいえ、これに完全な決着をつけるのは容易なことではない。視点を変えるならば、客観的事実か主観的幻想か、という二元論的発想自体に、限界があるようにも思われる。主観と客観の織りなすグラデーションのどこかに、心や魂にとって意味深い世界があると想定することも可能である。臨床家的視点に立つならば、果てなき真贋論争に全勢力を注ぎ込むよりも、心や魂の現実としてのイメージについて精通し、その扱い方を洗練させる方が、ずっと有益であるようにも思われる。

結局、催眠を捨てて心的現実の概念にたどり着いたフロイト同様、深層心理学の知識と技法を高める以外に道はないだろう。ただし、前世である可能性も否定できないという点や、神秘的な体験が起こりやすいという点では伝統的な心理療法とは大きく異なっており、深層心理学に加えて、トランスパーソナルな視野も不可欠である。

そこで筆者が提案したいのは、前世という文脈を意図的に設定したことにして、イメージ療法の下位カテゴリーに前世療法を位置づけるという戦略である。ロナルド<sup>6)</sup>は的確にも、前世療法というネーミングは不適切であり、「前世」はメタファーとして理解すべきであると述べている。退行催眠によって前世のイメージが現れることは事実であり、中には著しい臨床的効果が現れることもある。しかし、前世体験が客観であるか想像であるかは括弧にくくり、どちらの可能性も残しながら、イメージそのものを現象学的に扱っていくのである。したがって、前世療法は正式には「前世イメージ療法」と呼ぶことを筆者は提唱したい。前世イメージ療法は、安易に前世の客観性を肯定せず、同時に否定もしないという立場に立ち、イメージによって立ち現れる心や魂の動きを促進し、現実と統合することを目指すトランスパーソナル心理療法なのである。

### IV 因果論的治療モデルの陥穽

#### (1) 過去指向の心理療法の現在

心の症状や問題の原因は過去のトラウマにあるとする理論的前提をもつものを、因果論的治療モデルと呼ぶことができる。このモデルには限界があるという指摘は少なくない。このモデルの代表は、周知の通り心理療法の原点である精神分析である。精神分析学派は、今日では理論的・技法的に非常に多様に発展しているものの、症状を幼児期の問題の繰り返しとして理解するという点において、このモ

デルの範囲内での展開に留まっている。

精神分析のモデルでは、一般的により早期のつまずきほど、より重篤な障害になると考える。すなわち、病理の重さを過去の時間軸に投影するという特徴が見られる。その必然的結果として、より早期の出産や胎児期に着目した、ランクの出産外傷説や、グロフによるBPM（分娩前後のマトリックス）理論などが登場する。記憶回復療法もこのモデルを基礎としている。前世療法は、肉体の生死を超えるという意味で飛躍があるものの、このモデルの延長線上にあると見ることが可能である。

精神分析系の治療モデルに対する一般的な批判としては、周知のように、あらかじめシナリオが決まっている（還元主義）、かえって過去に縛られてしまう（決定論）、現在や未来に目が向かない（過去指向への偏り）、効果が出るのに時間がかかる、実証性が乏しい、などがある。もちろん他方では、緻密な治療論と技法、教育・研究システムの充実、心理療法家のプロ意識の高さなど、他の流派が見習うべき点も多くもっている。

しかし、このような因果モデルの陥穽によって、過去の詮索を試みない現在・未来志向の心理療法が次々と発展してきた。客観性を重視した行動主義の流れにはじまり、「今、ここ」の在り方を重視する多様な人間性／実存主義的心理療法、さらに超個の領域に展開した諸々のトランスパーソナル心理療法、最近広がりを見せるポストモダンなブリーフセラピー等々である。これらは、今ここでの気づきを深化させたり、未来へのイメージや意志を発動したり、原因を追求せずに問題の解決や解消を試みたりして進行し、過去を特別に重視するわけではない。このように、第二、第三、第四勢力以降の心理療法が盛んに発展し、今日では因果論的治療モデルは相対的に衰退しているように見える。前世療法は、このような趨勢のなかで、前世といういわばアクロバティックな展開を切り札に、時流に逆らって現れた因果論的心理療法と見ることも可能だろう。とはいえ、前世療法はやはりこのモデルが共通してもつ限界を継承している。心の病はしばしば、生育歴、家族関係、重要な出来事、社会、環境、風土、友人知人、哲学、微妙なディスコミュニケーション、など大小の多様な要因がシステムティックに連関しながら積み重なって生じているというのが、今日の一般的な見方である。とするならば、前世療法のような、個人内のひとつあるいは少数の外傷的な出来事に原因を帰結させるというのは、あまりに素朴で狭量な決定論であり、モデルとしての限界や適さないケースがあることは十分予測できる。

#### (2) 前世療法の課題：素朴決定論からの脱却

前世療法が因果論的治療観に基づいている以上、以下のような陥穽に熟知し、それを回避する配慮が求められる。第一に、過去の物語へとらわれてしまう場合があること。



たとえば、幼児期や前世の出来事を想起しないとよくなり、などと考えてしまうケースは少なくない。素朴な決定論を信仰することによって、問題が解決するどころか、人生の物語が狭小化されてしまう場合がある。

第二に、因果論的な前提を心理療法家が強くもっていると、クライアントはそれに応えようとして、無意識的に過去の物語を創造してしまうことがある。これに気づかず奨励してゆけば、最悪の場合には、記憶回復療法がそうであったように、セラピー因性の障害を創造してしまい、一層悪化させる危険性がある。

心理療法とは、むしろクライアントの抱くファンタジーや脚本、物語をどのように生かしたり、転換させるかについて、十分な思慮と戦略をもたねばならない。つくりだされる物語に主権をすべて委ねてしまい、それを焚きつける一辺倒では、とても危険である。無意識的な力に呑み込まれてしまって現実世界にグラウンディングできなくなったり、無意識的な自我の防衛的戦略によって、真の魂の動きが阻害されるおそれもある。つまり、イメージや物語とどのようにつきあうかが問われているのである。イメージをありのままに受け取る現象学的態度と、欺瞞を打ち破る眼力と強さ、現実と折り合いをつけるためのバランス感覚、因果論以外の視点から問題を眺められる柔軟性など、心理療法家の熟練が求められるのである。

## V 前世療法を求める心理

### (1) 動機の内面

前世療法を受けにくるクライアントの動機は多種多様であるが、しばしば共通する心理も見られる。ここでは、筆者の経験からその印象を列記したい。今後社会心理学や宗教心理学等の領域で調査されれば興味深い研究になると思われる。

前世療法を希望した理由としては、生きる意味を知りたい、神秘体験をしたい、問題の原因を知りたい、魂の真実を知りたい、カルマを知りたい、ソウルメイトやマスターに会いたい、ほかの治療法で全部だめだったので試してみたい、などという回答が多い。一方、明言はしないものの、これらの裏側には、今の現実から離れて神秘の世界へ逃避したい（回避動機）、どうにもならないので魔術的に解決して欲しい（無力感や依存心）、自己自身を決定して欲しい（物語による自己の定位願望）、感情をはき出したい（カタルシスの欲求）、前世に原因を見いだして今の自己責任を逃れたい（責任転嫁動機）、などの動機が隠れている場合がある。もちろん、自分の前世を知りたい、という素朴な好奇心だけの場合もある。また、かつて至高体験や神秘体験をしたことがあり、その意味を知りたいとか、確認したいという人もいる。

これらの動機は、真摯な自己成長・自己探求的動機と、

回避・逃避・依存・責任転嫁などの自己防衛的な動機、それから興味本位な好奇動機とに分類することができるだろう。実際には、しばしばこれらが混在しているように思われる。

### (2) 前世療法の課題：前／超をあるがままに受けとめる

避けるべきことは、クライアントの動機に応えるために、単純に前世体験をさせることがよいことであるとセラピストが考えてしまうことである。そうすると、情熱的に前世退行を誘導し、クライアントはその期待と情熱に応えようとして、記憶の断片をかき集め、半ば無意識的に前世の物語を創造してしまうかもしれない。それを前世として共同で祭りあげてしまえば、そしてウィルバー<sup>13)</sup>のいう「引き上げ主義」の典型的な誤謬に陥る。重要なのは、幼児期であろうと前世であろうと、あるいは想像の世界であろうと、起こるべくプロセスをあらかじめ期待せずにじっくり見守り、それをそのままに受け取る姿勢である。

一方で、伝統的な心理療法家や精神科医が犯しがちなのは、真にトランスパーソナルな動きを単なるプレパーソナルな願望の反映であると切り捨て、低次の欲求に還元してしまうことである。これも前者と同様に完全に誤った「引き下げ主義」<sup>13)</sup>による対処であり、クライアントの霊的成長を妨げることになる。

真に意味深いプロセスを促進するためには、クライアントの真摯な動機と資質を素材として、心理療法家は現象学的で中立な態度を保つ必要がある。特に、前／超のどちらかを切り捨てるのではなく、現れるものを現れるままに受けとめ、ふさわしいアプローチを柔軟に行える能力が要求される。

## VI 心理療法における世界観の取り扱いについて

### (1) 心理療法家の仕事

心理療法家は、問題の解決に関わるだけでなく、その背後に横たわっている人生の問題にも直面する場合がある。そこでは世界観や価値の問題から目をそらすことはできない。心理療法家は原則として、素朴な人生相談屋とも異なり、あるいは宗教家や霊能者とも異なった立場にあるということが重要である。特定の世界観や宗教観を提供したり、個人的な価値観を教える立場でもなく、その権限もない。かりに特定の世界観や価値観にふれる場合には、それを提示することの影響について十分に配慮し、なおかつひとつの考え方として相対化して語り、それをクライアントが受け取るか受け取らないかが、まったく自由であるような雰囲気をつくっておかねばならない。心理療法家の仕事は、クライアント自身がより強められ生きやすくなるような世界観を、彼自身の判断によって獲得する過程を援助するということなのである。

「前世」の存在はすでに見てきたように、実証された事実ではなく、ひとつの世界観にすぎない。前世療法はその呼称からして「前世」を前提にしているように聞こえる。そして実際、素朴な心身二元論に基づいた輪廻転生が前提とされ、世界観の壁を十分な検証もないままに安易に乗り越えてしまっているセラピストが多い。その結果、無自覚な越権行為がさらにエスカレートして、精神世界に独特なさまざまな考えや、宗教的信念、チャネリングによるメッセージなどが、安易に情熱的に語られてしまう場合がある。これは宗教家、占い師、霊能者の仕事であり、少なくとも心理療法ではないことは明らかである。さらに付言すれば、宗教家や霊能者であっても、それぞれの同業者集団の枠組みと倫理があり、その暗黙のガイドラインにしたがっているものである。

レイセラピストは先述のように、しばしば宗教の枠組みからも、心理療法の枠組みからも逸脱しており、無秩序の中で諸表象と対峙してしまい、自分自身の居場所を確認する枠組みをもっていない。このことは、彼自身にとっても、クライアントにとっても、危険な状態なのである。このような地に足のつかない前世療法セラピストが、呪術的で自己愛的な未分化な世界観を語ったとしたら、クライアントにとっては大変迷惑であろう。実際に、精神世界系の多くのレイセラピストは、過剰で断定的な意味づけをするのが得意である。たとえば身体症状や事故などがあると、内面的問題と安易に結びつけるなど、前合理的な思考パターンがよく見られる。しかもそれはしばしば「直観」とか「メッセージ」として権威づけられて語られるので、逆らい難い雰囲気をもつことが多い。もしクライアントに十分な強さがなければ、単に傷つけられるだけではなく、未分化な世界へと道連れにされてしまうかもしれないのである。これは、子どもが大人に説教しているようなものである。

## (2) 「世界観+素朴な善意+催眠」の危険性

心理療法では、困難な問題によってセラピスト自身はどうにもならない重さを感じる局面がしばしばある。そのようなときに、対話による心理療法の基礎的技術がないと、セラピストが自らの無力感から逃れるために、一番安易な「説教」や「迎合」という方法を無意識に選択しやすい。「説教」や「直観」「メッセージ」でねじ伏せることは、複雑で困難な事態に直面したときに、その場を収めるのには一番効果的な方法である。一方で、必要以上に優しい言葉やきれいな言葉でクライアントを褒め称えたり、時間を延長して熱意を見せようとするのは、セラピスト自身が自分の無力感を解消しようするためのいわば防衛機制である。

セラピストがこのような無意識的な自己防衛をしながら、素朴な善意をもって催眠を用いれば、クライアントも

無意識のうちになんとかお返しをしようと思ひ、セラピストの語る世界観を見せようと思うだろう。特に、自信のないセラピストは不安をもっているから、セラピストに合わせられないと危険だと感じ取ってしまうクライアントもいる。このような事態では、実際にはクライアントの方がセラピストなのである。対話による心理療法でもこのようなことは起こるが、理性の抑制がゆるんだ催眠下ではより容易に起こりやすい。特に、他者迎合的なヒステリカルな性格のクライアントや、普段から自己評価が低かったり、他者を助けることによってのみ自尊心を保てるようなクライアントであれば、ほとんど確実にセラピストを喜ばせる結果を出すだろう。ここには真実も癒しもまったくなく、道連れにされるクライアントにしてみればたまったものではない。

善意や熱意はそれ自体悪いものでは決してないが、その背後にある心理への自己洞察や、基礎的技術およびそれを使いこなすメタスキル<sup>1)</sup>がなければ、心理療法は機能しない。カルト教団の信者が、非常に誠実で善意に満ち、情熱的でもあるにもかかわらず、しばしば反社会的な悪に傾くという現象と、基本的に同一である。ニューエイジと呼ばれる人々に対するウィルバーの次の警告は、霊性に関わるすべての人が耳を傾けるべきであろう。

「彼らは善意の人であるかもしれないが、にもかかわらず危険人物だ。なぜなら、彼らは、必死の働きかけが必要な本当のレベル—身体的、環境的、法的、道徳的、社会経済的レベル—から、人々の注意をそらしてしまうからだ。」<sup>12)</sup>

## (3) 前世療法の課題：現象学的な中立性

「前世」という合意されていない世界観を持ち込むことへの慎重な配慮が必要である。無自覚な世界観と素朴な善意、それに催眠が加わるならば、危険な結果にもなりうる。その意味でも、十分な心理療法の素養をもった心理療法家以外が前世療法を行うことは薦められない。心理療法家は、世界観や解釈について冷静な視点を持ち、現象学的な中立な態度を保つことが求められる。

## Ⅶ おわりに

前世療法にまつわる諸問題を概観し、問題提起をしてきた。副題の通り、前世療法の問題と可能性を論じたつもりであるが、可能性よりも問題の指摘がずっと多くなってしまった。これは、筆者が心理療法においてもっとも根本的な原則が、霜山<sup>7)</sup>のいう「primum non nocere (害を与えざること第一なり)」であると信じるからにはほかならない。質の高い心理療法が身近になることは歓迎だが、他者を真に生かさぬ粗悪で安易なものが流布していく事態は看過できない。クリティカルな論調が目立つのは、筆者が

実際に精神世界の領域に踏み込みながら多くの問題点を痛感し、それを踏まえてトランスパーソナル心理療法の健全な発展を心から願うゆえである。筆者が精神世界の現場に実際に足を踏み込んでしばしば出くわしたのは、残念ながらスピリチュアリティよりもむしろ未分化なエゴの跋扈であった。その経験からすると、本論で前世療法に関して論じられた多くのことは、他のトランスパーソナル心理療法にも通底する議論ではないかと思われる。

総合的にいえることは、前世療法とは結局、退行催眠を用いたイメージ療法のひとつの技術であり、その用い方によっては、魂の領域に働きかける有効なトランスパーソナル心理療法にもなりうるし、単なる際物的好奇心をそそる遊びや、金儲けや有害なマインドハッキングの道具にもなりうるということである。前世療法が有効に活用されるためには、心理療法家の幅広く柔軟でバランスのとれた能力が必須である。その能力には、臨床心理学に通底する自力に加え、トランスパーソナルな領域での魂に対する知恵も求められる。このどちらも、専門家集団の中で切磋琢磨され、検証されていかなければ、ひとりよがりなものに終わる危険性が高い。そして、魂の動きと日常性をうまく架橋する援助も必要である。結局のところ、前世イメージ療法は、ほかのトランスパーソナル心理療法と同様に、スキルとともにそれを越えた心理療法家のメタスキルが重要になってくるのである。

#### 参考文献

- 1) Almeder, R. : Beyond death, Charles C Thomas, Illinois, 1987 (『死後の生命』笠原敏雄訳、TBSブリタニカ、東京、1992)
- 2) Edwards, P. : Reincarnation : A Critical Examination, Prometheus Books, United States, 1996 (『輪廻体験：神話の検証』皆神龍太郎監修、太田出版、東京、2000)
- 3) I.A.R.R.T., About IARRT, <http://www.iarrt.org/index.html>, 2004.1.10取得
- 4) Mindell, A. : Metaskills : The Spiritual Art of Therapy, New Falcon Pubns, United States, 1995 (『メタスキル：心理療法の鍵を握るセラピストの姿勢』佐藤和子訳、諸富祥彦監訳、コスモス・ライブラリー、東京、2001)
- 5) Loftus, E. : Creating false memories, Scientific American, 1997 (仲真紀子訳：偽りの記憶をつくる。日経サイエンス、1997年12月号；18-25, 1997)
- 6) Ronald, J. : Past-Life therapy. Scotton, B.W., Chinen, A.B., Battista, J.R.(Ed) : Textbook of Transpersonal Psychiatry and Psychology, Perseus Books, New York, 377-387, 1996
- 7) 霜山徳爾『素足の心理療法』みすず書房、東京、1989
- 8) Stevenson, I. : Children who remember previous lives, University Press of Virginia, United States, 1987 (『前世を記憶する子どもたち』笠原敏雄訳、日本教文社、東京、1990)
- 9) Weiss, B. : Many Lives, Many Masters, Simon&Schuster, New York, 1988 (『前世療法：米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』山川紘矢・亜希子訳、PHP研究所、東京、1991)
- 10) Weiss, B. : Through time into healing, Simon & Schuster, New York, 1992 (『前世療法2』山川紘矢・亜希子訳、PHP研究所、東京、1993)
- 11) Wilber, K. : Eye to eye: The quest for the new paradigm, Anchor/Doubleday, New York, 1983 (『眼には眼を：三つの眼による知の様式と対象域の地平』吉福伸逸他訳、青土社、東京、1987)
- 12) Wilber, K. : Grace and Grit, Random House, United States, 1991 (『グレース&グリット1・2』伊東宏太郎訳、春秋社、東京、1999)
- 13) Wilber, K. : Sex, Ecology, Spirituality : The Spirit of Evolution, Shambhala, U.S.A., 1995 (『進化の構造1・2』松永太郎訳、春秋社、東京、1998)
- 14) Wilber, K. : The Marriage of Sense and Soul : Integrating Science and Religion, Random House, United States, 1998 (『科学と宗教の統合』吉田豊訳、春秋社、東京、2000)
- 15) Williston, G., Johnstone, J. : Discovering your past lives, HarperCollins, 1983 (『生きる意味の探求』飯田史彦訳、徳間書店、東京、1999)
- 16) 矢幡洋『危ない精神分析』亜紀書房、東京、2003

#### 要約

本論では、これまでわが国では学術的に検証されることなかった、前世療法について取り上げ、その問題点と可能性について臨床心理学的な視点から検討した。第一に、わが国では前世療法が諸々の確立された心理療法から隔絶しているという現状について調査し、その問題点を指摘した。第二に、催眠状態で想起された前世の記憶の客観性について検証した。第三に、因果論的治療モデルの限界を指摘し、素朴な決定論からの脱却を示唆した。第四に、前世療法を求めるクライアントの動機について分析した。第五に、輪廻転生という世界観を心理療法において扱うという問題について検討した。結論として、前世療法は正式には「前世イメージ療法」として呼ぶことを提唱し、現象学的で成熟した心理療法家によって実施されるべきであると指摘した。前世イメージ療法は、その使い方によって、有害なセラピーになる危険性もあるし、意味のあるトランスパーソナル・イメージ療法にもなりうるだろう。

#### Summary :

In this paper I discuss, in terms of therapeutic viewpoint of Clinical Psychology, the problems and possibility of Past-Life Therapy (PLT), which is practiced almost entirely independently of, and thus unaided by, many other established psychotherapies in our country. I maintain that once taking the therapeutically integrated phenomenological attitude PLT is likely to be able to relate itself even to the established

psychotherapies. To show this, I first sort out the distancing factors that separate the both sides. Second, I examine the reliability and factuality of Past-Life experiences induced by PLT. Third, coupled with this, I examine its deterministic approach based on the cause and effect model, and suggest a way of shirking the simple and naive determinism. Fourth, I analyze the motives of the clients of PLT, who are generally affected by the worldview of Samsara (transmigration of the soul). Last, but not least, I hence concern myself with a question to what degree PLT based on that worldview is therapeutically apt. From these examinations, I conclude that PLT be understood

primarily as Past-Life Image Therapy, and that it can become for therapists a fruitful method that is worked on the soul with their high therapeutic skills and spiritual insights. Without the latter, Past-Life Image Therapy may become rather detrimental to the clients. Nonetheless, it is to be well noted that PLT also has a possibility to become a valuable transpersonal psychotherapy.

**Key Words :**

Past-Life Therapy, lay therapist, established psychotherapies, false memory, Past-Life Image Therapy,